出題分析		
試験時間 90 分	**配点** 100 点	**大問数** 4 題
分量（昨年比較）〔減少 同程度 [増加]〕		**難易度変化**（昨年比較）〔易化 [同程度] 難化〕

【概評】

論述問題は，昨年度の総文字数 840 字からさらに増加して 880 字となった。また，設問の個数は 1 問減少して 7 問であったが，設問当たりの最大文字数は 240 字以内であった昨年度と比べ今年度は 400 字以内と増加した。これは，2019 年度に 500 字の設問が出題されて以来のものであった。一方，それ以外の問題は計 27 問で，昨年度から 2 問減少した。時代別では，縄文時代から昭和戦後まで問われ，昭和戦後からの設問が 3 年連続で出題された。分野別では，政治・外交・経済・文化史など，例年通りバランスの取れた出題であった。

語句記述の設問の難易度は概ね例年通りであったが，史資料に基づく 400 字の論述問題が出題され，丁寧な史料読み取りを要する問題が増えたため，難化した昨年度と同程度の難易度であったといえるだろう。

設問別講評

問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
〔1〕	原始から古代における儀礼・祭祀・信仰	縄文時代から平安時代の儀礼や祭祀に関するリード文をもとに，政治・文化を中心とした設問。論述問題を含め，教科書範囲の標準的な難易度の出題であり，確実に得点したい。問 3.「358 本の銅剣」，「島根県」という点がキーワードになる。問 8. 庸は中央，雑徭は地方での労働負担であり，庸はそれに代えて布を納めることがあったことを違いとして述べる。	標　準
〔2〕	前近代における大陸からの渡来僧・宣教師の存在	奈良時代から江戸時代までの仏教伝来のリード文をもとに，政治・文化・外交を中心とした設問。問 3. 史資料の読み取りに基づく 400 字以内の論述問題が出題され，解答に苦労しただろう。史料 A～F の内容を踏まえ，渡来僧や宣教師と日本の権力者との関係および文化の影響について論じる。史料 C は明との関係について述べる。史料 F は元禄年間の資料であるが，設問から「18 世紀前半」までを述べる必要があることに注意したい。	やや難

設問別講評			
〔3〕	元禄期の文化	元禄文化に関するリード文をもとに，江戸時代の政治・経済・文化を中心とした設問。問 2. 諸藩が大坂に設置した蔵屋敷における取引について述べる。蔵屋敷や蔵物，蔵元・掛屋の区別にも注意したい。問 4.「国性(姓)爺」とはだれかと問われると迷うだろう。漢字の記述も難しい。問 5. 史料 A，B から，絵入りの読み物で庶民にも親しまれた御伽草子を想起したい。また，史料 B には漢字仮名交じりの文章やふりがなが記されていることも読み取れる。活版印刷は文字を組み並べて印刷するものであるため，このような書の印刷には木版印刷の方が向いていたと考えたい。	標　準
〔4〕	金子堅太郎の足跡，マッカーサー書簡	金子堅太郎に関するリード文と警察予備隊の創設に関するマッカーサー書簡をもとに，明治時代から昭和戦後の政治・経済・外交・文化を中心とした設問。問 1. ウは歴史総合の要素を含んだ出題。ミドハト・パシャは 19 世紀後半のオスマン帝国（現トルコ）の宰相。ミドハト憲法はアジア初の憲法であった。問 4. 金融恐慌は第一次世界大戦後の戦後恐慌に加え，関東大震災後の震災恐慌による銀行の経営悪化が重なって起きた。問 5. 警察予備隊設置に関するマッカーサー書簡が作成された背景として、米ソ冷戦の激化，中国共産党の優勢，占領政策の転換，朝鮮戦争を述べるとよいだろう。	標　準

合格のための学習法
今年度の九州大学の日本史は，論述問題の総文字数が増加し，さらに 400 字の大論述が出題されたため受験生にとって解答に時間を要する問題となった。初見史料をもとにした設問には史料読解力も求められているが，出題内容は総じて教科書レベルの基礎・標準的な良問が多いため，教科書の精読を通じて出来事の背景・経過・結果・影響についての知識を身に着けておくことが重要である。